

分析化学の系譜



壹岐 伸彦

30年ほど前、博士研究員としてアイオワ州立大学に滞在していたとき、コロラド大学ボルダー校化学科を訪ねたことがありました。大気化学のラボや教室を案内されるままに見学しました。大講義室に通されて目に付いたのは、壁一面に記された樹形図でした。化学科の教員それぞれのメンター、さらにそのメンターとさかのぼり、メンターの始祖までをたどることができました。それはJ. Priestley (1733~1804) だったと記憶しています。化学を切り拓いた先人達を畏敬し、連綿と続く研究の伝統つまり系譜を大切にしているのだと感じました。その中で学風が形成され、それに誇りを持つのでしょうか。アメリカは国家としての歴史が浅いが故に、出自や伝統を重んじ、敬うのかと思われました。アイオワ州立大の図書館の外壁にも偉大な科学者の名 (Pasteur, Faraday, Newton, Darwin, Liebig など) が大きく刻まれています。

さて今年9月15日(火)~17日(木)、みちのく仙台は東北大学・青葉山新キャンパスで第75年会をお世話することとなりました。東北支部として前回お世話したのは8年前の第67年会であり、理学部・西澤精一先生が当誌にお書きになっているように日本初の分析化学講座が設立されてちょうど100年の年でした(ぶんせき, 2018(5), 169)。日本における化学研究の始祖達が当時の理学部化学科にご在籍でした。そこで形成された学風が今の化学科に受け継がれていると私は拝察しています。弟子は師匠の影響を受けるものですので、それが系譜となって学風を形づくります。しかし学風はそれにどっぷり浸かっている者には空気のように当たり前のもので、常に意識するものではなく、他の系譜の人間と接するときに意識するものです。当人には当たり前のような系譜を、後世に伝ええないのは文化の喪失であると考え、同じ理学部ご出身の大先輩の渡會仁先生に系譜を記録する相談を第73年会の席でもちかけました。そうしているうちに The Academic Family Tree というアメリカ発のウェブサイトに行き着きました。学者の師弟関係を樹形図で示すサイトです(化学については <https://academictree.org/chemistry/index.php>)。誰が誰に師事したか、どこで研究員をしたか、などの単純なつながりを示すだけのサイトなので、気軽に登録してはいかがでしょうか。

ともあれ、第75年会は三四半世紀の歴史を重ねてきた学術集会です。第100年会も見えてきたこのタイミングを記念した若手シンポジウムを企画しました。会場のキャンパスで稼働しているQSTの次世代放射光施設NanoTerasuにちなんだシンポジウム、東北地区の強みとしている分析試薬や核酸化学、バイオ計測に関するシンポジウムも企画しました。仙台の歴史と文化を伝承する仙臺緑彩館での懇親会もお楽しみ頂ければと思います。参加者それぞれの系譜を意識しつつ、それらの相互作用や反応をとおして新しい系譜を創出できる契機になれば幸いです。みちのく、仙台、東北大へのお越しを心よりお待ちしております。

[IKI Nobuhiko, 東北大学, 第75年会実行委員長]